

雅楽入門 ～平安時代の音楽を聴く～(日本史例会)

11 月 15・17 日開催

『雅楽入門 ～平安時代の音楽を聴く』

博士後期課程一年 大多和朋子

『雅楽入門 ～平安時代の音楽を聴く』と題した今年度の日本史例会は、雅楽の演奏会での鑑賞 と、その手引きとなる「予備知識」を容れる報告会とを組み合わせで企画された。

雅楽は奈良時代から伝わる日本の宮廷音楽である。しかし、その楽器、演奏法、曲目、何れをとっても全く馴染みが無く、欧州の宮廷音楽たるクラシックの基礎知識はあっても、雅楽のそれを持つのは極一部に限られる。

雅楽を構成する楽器には、ふきもの(管)＝箏箏(ひちりき)、横笛(おうてき)、笙(しょう)、ひきもの(絃)＝箏琴(そうのこと)、琵琶、うちもの(打)＝鞆鼓(かつこ)、鉦鼓(しょうこ)、大太鼓(だだいこ)がある。主旋律は管が担当し、絃は飾りにまわる。雅楽は、代々の楽人の家で伝承される所謂「お家芸」であり(現在はその他の演奏家も多い)、各家々に専門とする楽器を伝えてきた。

雅楽は、伝来経路により二つに分類される。唐楽は、奈良時代に渡来した中国(唐)の楽と、中国経由の林邑・西域・天竺等の楽を含み、楽器は先述の総てを使用する。日本の雅楽の中心であり、現在の原型でもある。もう一方は高麗楽(こまがく)で、朝鮮半島の各国と渤海の楽の総称である。楽器は弦楽器と笙を用いず、高麗笛(こまぶえ)を使う。

雅楽での1オクターブは「五音(ごいん)」と言い、「宮・商・角・徴・羽(きゅう・しょう・かく・ち・う)」で表す。その位置をずらすことで移調でき、それによって変化する6つの調子が「六調子」で、壹越(いっこつ)・平調(ひょうちょう)・双調(そうちょう)・黄鐘(おうしき)・盤渉(ばんしき)・太食(たいしき)がある。同じ曲でも調子を移すと雰囲気は全く

変わり、同じ曲であることにも気づき難い。また、五音や六調子は陰陽五行説と結び付いて、季節・方位・時間・動物等を配されており、曲や音そのものが特定の意味を結んだ。

当日は、調子の異なる同じ曲を聴く、舞楽（舞のついた雅楽）のビデオを見る、楽人の衣装である直垂装束の実物に触れる等の視聴覚資料も用意した。

演奏会は国立劇場小劇場で行われ、東京楽所の奏楽による「萬秋楽一具（盤渉調）」を鑑賞した。楽師東儀兼彦氏と漫画家岡野玲子氏の対談式の解説も用意され、充実した演奏を味わうことが出来た。